

天神川原 てんじんがわら

# 狐の手まり

昭和五十七年十月五日号

話してくれた人

荻野祥吉さん(平垣町)

富士郡平垣村の松永屋敷といえは名代なだいの豪邸で旗本領の地方代官の役割をつとめていました。

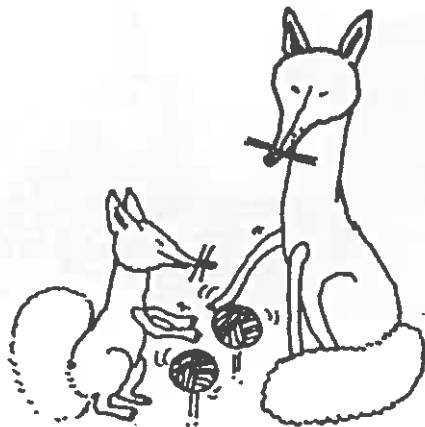
山本幸七じいさんは、その松永屋敷の植木職人として働いていました。

## ひとつの子もわが子も

### トントントント

その晩はとりわけ月の光が明るく照らして  
いました。

家路を急ぐ幸七じいさんが天神川原の田ん



ほ道までさしかかると、何やら足元にころが  
つて来ました。

手にとつてみると、やわらかな白い毛をま  
るめた手まりです。

「ごりゃ結構なものが……。下の子供たちの  
おもちゃにもらつていい」

幸七じいさんには、上から下まで六人の子  
供たちがいたのです。

さあ、下の子供たちは大喜び。このまりは  
不思議によく跳ね、その上「コンコン」と軽い音  
色を出すのです。

やがて、家中の者がぐっすり寝込んだ真夜  
中のごと、だれかが雨戸をたたたく音が聞こえ  
ました。

「幸七じいさん「コンバンは。人間の子もわが  
子もアソブアソブ……」

「いったい、こんな夜中にだれだろう」

戸を開けると、外は月の光がますます美し  
く、その向こうに大きな白狐が逃げて行くこ  
ろでした。

翌朝、幸七じいさんは白い手まりを、もと  
の場所にそつと返してやりました。それは母  
狐が子狐のために自らの毛をぬいて作った、  
狐の手まりだったので。